クラシック音楽講座

第６講　ドイツ・ロマン派（1）胎動・開花

シューベルト メンデルスゾーン シューマン

講師：佐藤卓史

2022年8月14日（日）　小手指公民館分館

19世紀、社会の大変革を受けて新たな音楽の潮流が生まれた。
巨匠ベートーヴェンの眼差しの先に、次の世代の音楽家たちが見たものとは？
クラシック音楽の中核ともいえる「ロマン派」のはじまりを、3人の作曲家を通して俯瞰する。

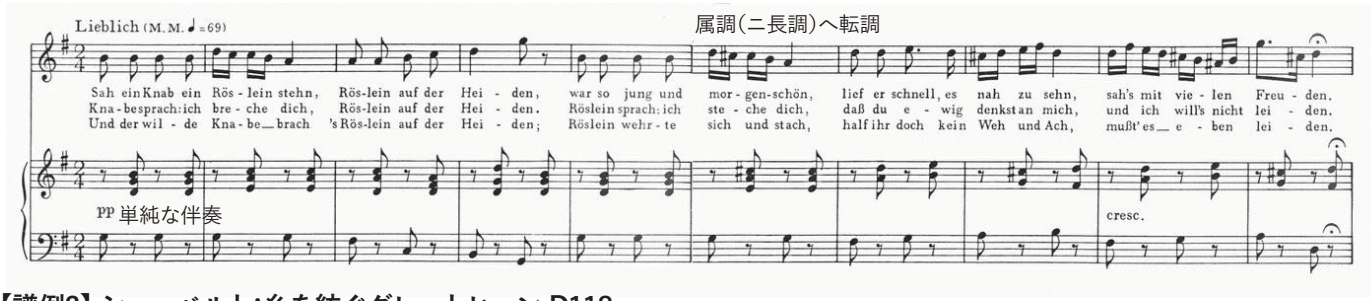
1. ロマン派音楽とは？

【時期】　ほぼ**19世紀**（1800年代）の100年間
「古典派」時代の音楽と共通する/継承した要素も多い
・曲種（**交響曲**が至高）　・楽式（ソナタ形式・変奏曲形式）　・調性/機能和声　・ホモフォニー
【ロマン派独自の特徴】
（1）**文学**・他の芸術分野の影響
・標題音楽（↔絶対音楽）の隆盛　→交響詩（リストが創始）
・総合芸術の指向　→楽劇（ヴァーグナー）
（2）「**主観**」「**内面**」「**感情**」を重視　（古典派時代は「普遍性」「真理」「理性」）
・**ナショナリズム**の発露（民俗音楽の採用、発想標語をイタリア語から各国語へ）→国民楽派へ
・「ここではない、どこか」（異世界、過去、自然）への**憧れ**
・語法の**複雑化**（機能和声の拡大、遠隔転調、調性からの逸脱、拍節の偽装）
・波がうねるような表現（“浪漫”）　＜＞（クレシェンド＋デクレシェンド）の多用
・「**作曲家の世界**」　作曲家は職人から**芸術家**へ
・作品規模の**巨大化**
（3）19世紀は**革命**の時代　市民革命（音楽の受容主体が市民へ）/産業革命（楽器の改良・大量生産）
・奇抜な音響効果
・**ヴィルトゥオーゾ**（超絶技巧演奏家）のブーム
・**家庭音楽**の流行　→「**性格小品**」（ピアノ）の爆発的需要
【地域】
初期の震源地はドイツ文化圏 →「**ドイツ・ロマン派**」
・はじまりは古典派の伝統を受け継ぐウィーン（南ドイツ文化圏）
・やがてライプツィヒ、デュッセルドルフなどの商業都市（北ドイツ文化圏）へ拡大
後にヨーロッパ全土へ伝播していく（国民楽派）

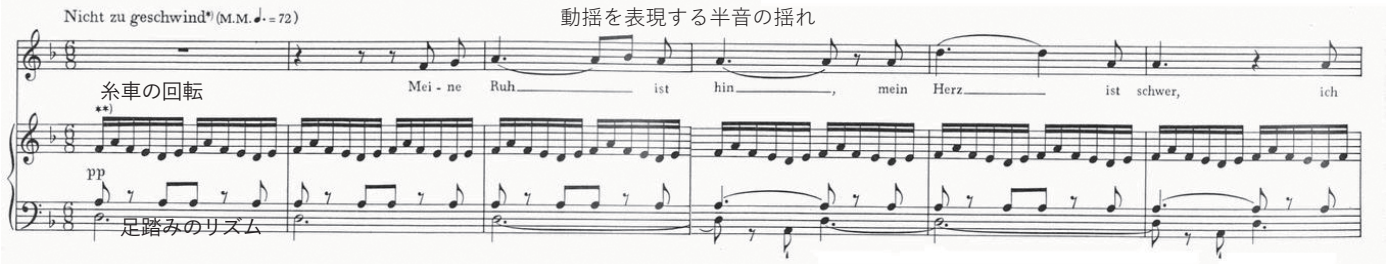
【ドイツ・ロマン派前期の主要作曲家】（本日の登場人物）
●**フランツ・シューベルト Franz Schubert (1797-1828)**
●**フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847)**
●**ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856)**

2. フランツ・シューベルト（1797.1.31. ウィーン ～ 1828.11.19. ウィーン）
【生涯】小学校長の父をもち、教育的な環境で育つ。美声で宮廷礼拝堂聖歌隊に合格、貴族の子弟が通う**コンヴィクト**（帝室寄宿学校）に入学し**サリエリ**に作曲を師事。20歳前後で作曲に専念することを決意、実家を離れて友人たちの家を転々とする「ボヘミアン」生活が始まる。コンヴィクト時代の友人らが貧しい彼の生活と作曲活動を支え、やがて「シューベルティアーデ」と呼ばれるサークルを形成するようになる。26歳の頃**梅毒**を発病。以降体調不良を抱えながらも活発な創作を行い、知名度は次第に向上。尊敬する**ベートーヴェン**の一周忌にあたる1828年3月にはウィーン楽友協会で生涯一度の個展を開催するに至った。しかしその約半年後、急激に体調が悪化し、次兄フェルディナント宅で死去。**31歳**。死後、多くの未出版作品が次々に発表された。
【キーワード】シューベルティアーデ　主に友人たちの邸宅で開催された、シューベルトを囲む仲間たちの会。シューベルトの新作発表（ほとんどの作品はこのサークル内で披露された）のほかさまざまな出し物が用意され、最後には舞踏会となるのが常だった。ウィーン体制のもと集会や言論が封じられた窮屈な社会がその背景にあり、簡素で日常的な心地よさを好む当時の文化様式を「**ビーダーマイヤー**」という。多くのメンバーが画家や文筆家といった表現人でありながら、公には別に職業（主に官吏）をもつディレッタントたちであり、それぞれに才能を生かしてシューベルトを支援した（「カネヴァの集い」（Kann er was? 彼には何ができるのか？））。著名な中心メンバーに、最も頻繁に会場を提供した親友**シュパウン**、詩や台本を共同で作ったりもした悪友**ショーバー**、歌曲の普及に貢献した宮廷歌手**フォーグル**、画家の**クーペルヴィーザー**や**シュヴィント**らがいる。このような私的な会を活動拠点にした作曲家は珍しい。
歌曲の形式　同じ旋律（節）を繰り返す**有節歌曲**、繰り返さずに新しい旋律をつける**通作歌曲**に二分される。シューベルトはその中間にあたる**変奏有節歌曲**の形式を発展させた。
【作品】Op.番号が不完全なため、O.E.ドイチュ編纂の「**D（ドイチュ）番号**」で整理される。約1000曲。
■**歌曲**　約600曲（全作品の過半数）　独力でドイツ語歌曲の分野を開拓し**“歌曲王”**と称される
・糸を紡ぐグレートヒェン D118〈ゲーテ〉　17歳 最初の本格通作歌曲 ゲーテ『ファウスト』の劇中詩**【譜例2】**
・野ばら D257〈ゲーテ〉　典型的な有節歌曲**【譜例1】**
・魔王 D328〈ゲーテ〉　18歳 通作歌曲 4役の歌い分け、伴奏も至難 ゲーテに送るも無視「作品1」として出版
・音楽に寄す D547〈ショーバー〉　詩人はシューベルティアーデの仲間 有節歌曲
・ます D550〈シューバルト〉　変奏有節歌曲 後にピアノ五重奏曲の変奏曲主題に転用
・エルラフ湖 D586〈マイアホーファー〉　詩人はシューベルティアーデの仲間 雑誌付録として初出版
・ミューズの子 D764〈ゲーテ〉
・君は憩い D776〈リュッケルト〉
・夜と夢 D827〈コリン〉　詩人はシューベルティアーデの仲間
・若い尼 D828〈ヤケルッタ〉
・アヴェ・マリア D839〈スコット〉　歌曲集『湖上の美人』より 1825年大旅行で披露し絶賛を博す
・シルヴィアに D891〈シェイクスピア〉
●三大歌曲集　最初の2集はまとまったストーリーをもった「連作歌曲」
・連作歌曲『美しき水車屋の娘』D795〈ミュラー〉全20曲
・連作歌曲『冬の旅』D911〈ミュラー〉全24曲
・歌曲集『白鳥の歌』D957〈レルシュタープ、ハイネ、ザイドル〉全14曲　最晩年の歌曲の集成 **【譜例3】**
■ピアノ曲　ベートーヴェンと異なりピアノの名手ではなかった
・ピアノ・ソナタ 約24曲　第16-18番は生前出版の3大ソナタ、第19-21番は最晩年の3大ソナタ
・幻想曲 ハ長調 D760『さすらい人幻想曲』　単一主題から多楽章ソナタを構成した画期的作品**【譜例4】**
・楽興の時 D780（全6曲）　ロマン派の一大ジャンル「性格小品」の嚆矢 小品に美質を発揮**【譜例5】**
・4つの即興曲 D899、4つの即興曲 D935
・舞曲（約400曲）　34の感傷的なワルツ D779、12の高雅なワルツ D969ほか　生前から大人気
■交響曲　通し番号に諸説あり 下記は国際シューベルト協会の1978年公式見解に基づく
・交響曲 第7番 ロ短調 D759（『未完成交響曲』）　グラーツ楽友協会に第2楽章まで送付 **【譜例6】**
・交響曲 第8番 ハ長調 D944（『ザ・グレート』）　死の10年後にシューマンが発見 メンデルスゾーンが初演
■室内楽曲
・ピアノ五重奏曲 イ長調 D667『ます』　全5楽章 第4楽章が自作歌曲の変奏曲 コントラバスを含む特殊編成
・弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 D810『死と乙女』　第2楽章が自作歌曲「死と乙女」の変奏曲 漲る緊張感
・アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D820　ギターを弓で奏でる新楽器 短期間で絶滅 現在はVc, Vaで演奏
・ピアノ三重奏曲 第2番 変ホ長調 D929　1828年個展で演奏され大成功 若きシューマンも感激
【特徴】“ロマン派の開拓者”
・「**シューベルティアーデ**」の作曲家　仲間たちのために作曲　→**共感**が前提のプライベートな語法
・ベートーヴェンへの憧れとコンプレックス　→情緒的でまっすぐ進まない「**独自路線**」を目指す
・反復が多く、**長大**　「天国的な長大さ」（シューマン）　ビーダーマイヤー精神の現れ？
・ドイツ語歌曲の分野を独力で開拓　“歌曲王”
・のびやかな旋律線、遠隔転調、舞曲リズムが音楽的特徴
・31歳の短い生涯で1000曲を残した多作家　死後次々と作品が発表され次世代に影響を与えた

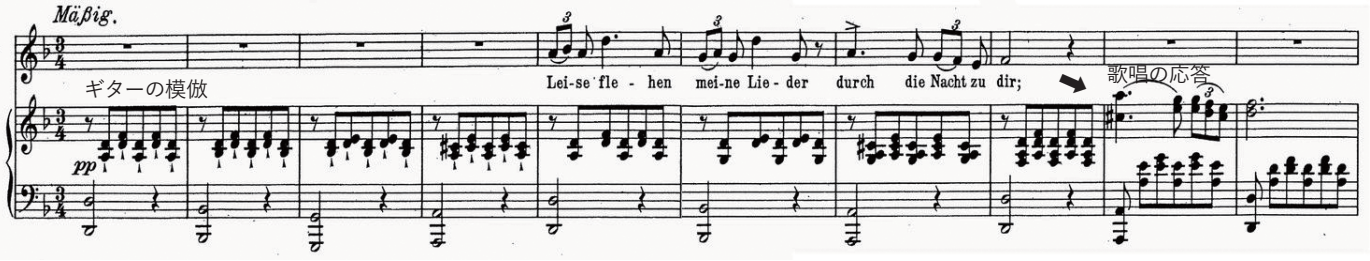
【譜例1】シューベルト:野ばら D257



【譜例2】シューベルト:糸を紡ぐグレートヒェン D118



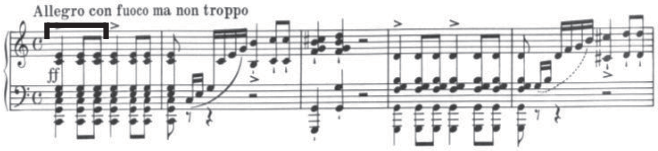
【譜例3】シューベルト:セレナーデ D957-4 (歌曲集「白鳥の歌」より)



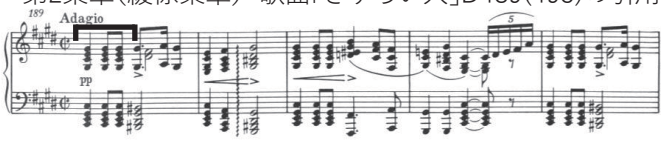
【譜例4】シューベルト:さすらい人幻想曲 D760

各楽章の動機的統一(長短短リズムの同音連打)

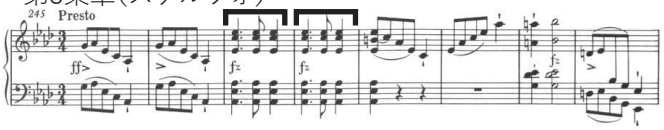
第1楽章



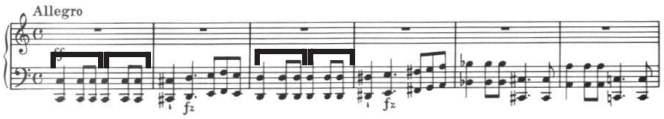
第2楽章(緩徐楽章) 歌曲「さすらい人」D489(493)の引用



第3楽章(スケルツォ)

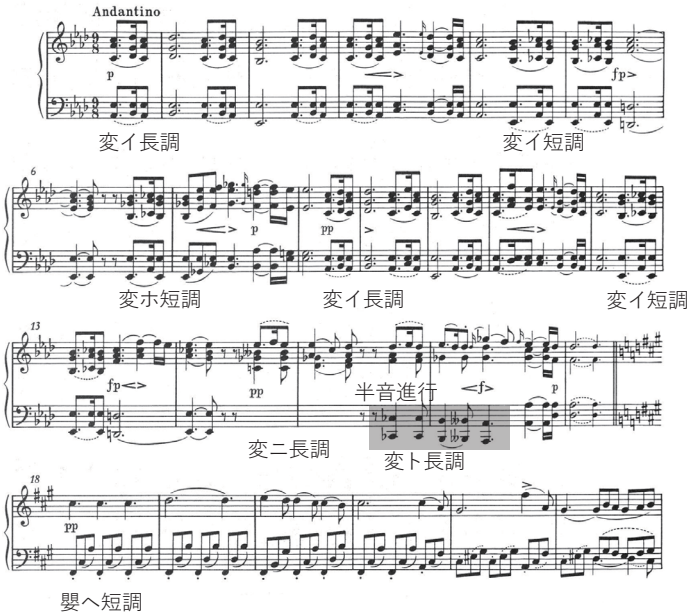


第4楽章 フーガ風開始



【譜例5】シューベルト:楽興の時 第2番 D780-2

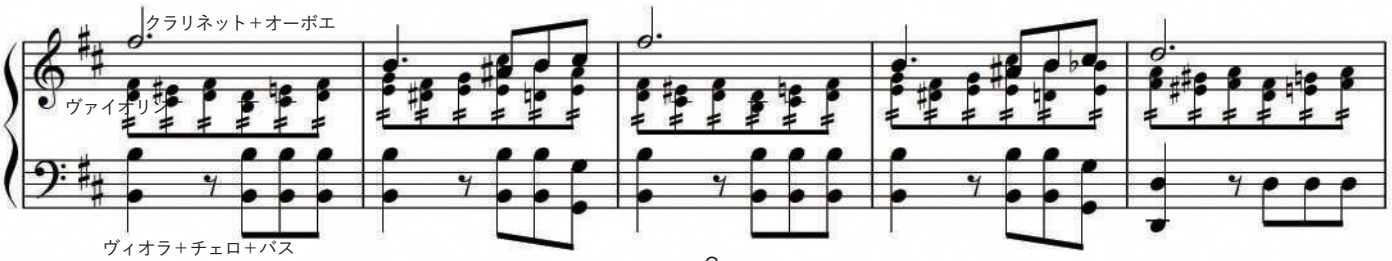
転調と半音階の使用



【譜例6】シューベルト:交響曲 第7番 ロ短調 D759(『未完成』)より第1楽章 第1主題

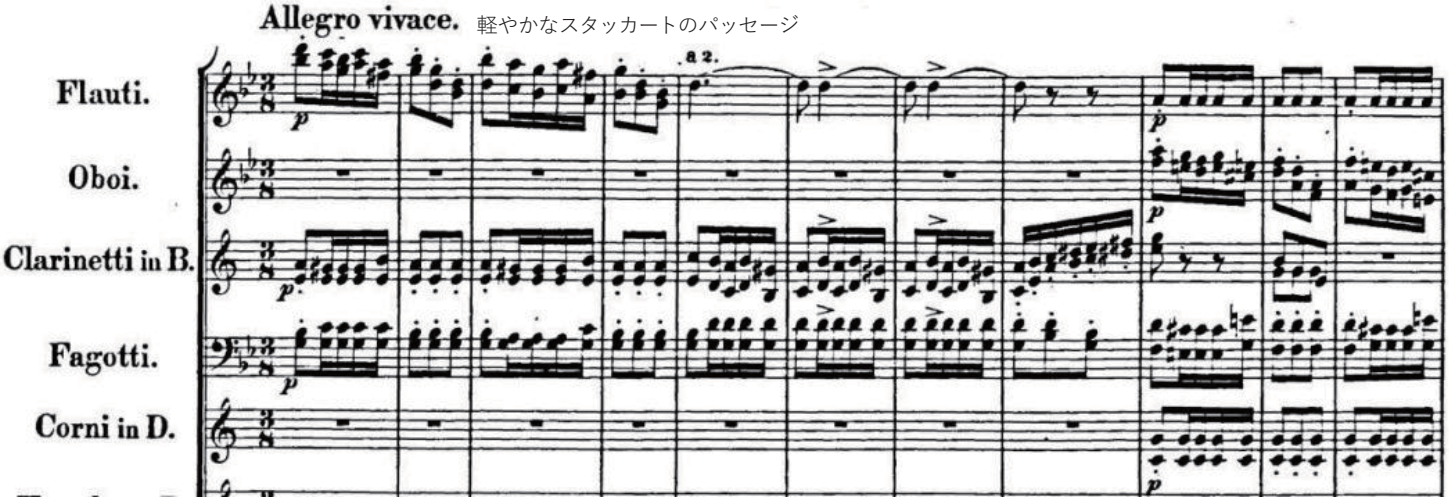
拍節感があいまい(3/4拍子? 6/8拍子?)

叙情的な旋律線

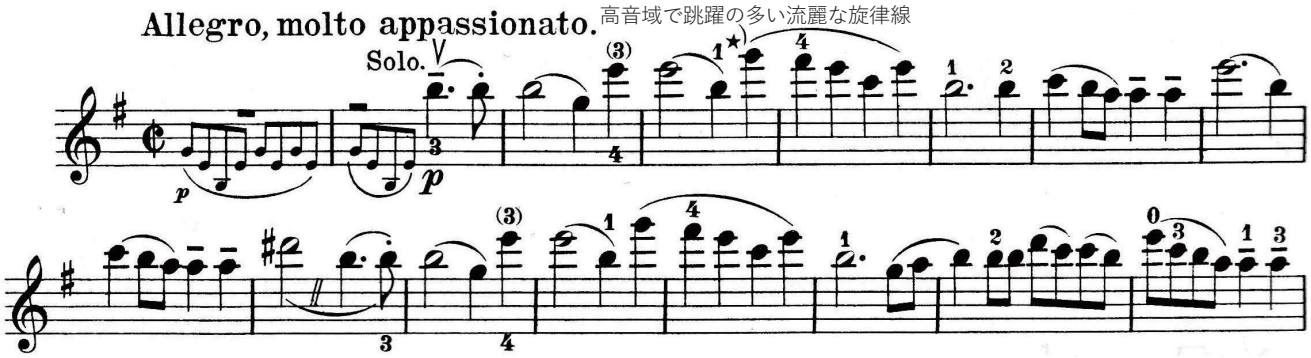


3. フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ（1809.2.3. ハンブルク ～ 1847.11.4. ライプツィヒ）
【生涯】裕福な銀行家の家庭に生まれ、幼くして才能を発揮。バッハ一族のスポンサーだった大叔母ザラ・レヴィの推薦で古典主義者ツェルターに師事、その紹介で12歳のときヴァイマールに赴き老**ゲーテ**と面会し寵愛を受ける。代表作**『夏の夜の夢』序曲**を17歳で書き上げるほどの早熟ぶりで、20歳のときベルリンでJ.S.バッハの**『マタイ受難曲』の蘇演**を指揮、バッハ復活の先鞭をつけた。以降たびたびイギリスに渡り、ピアニスト・指揮者として活躍。1835年ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団指揮者に就任。1843年には自ら資金を集めてライプツィヒ音楽院（現在のメンデルスゾーン音楽大学）を創立、教授陣に盟友シューマンやモシェレス、ヨアヒムらを招聘し、北ドイツ楽派の確立に貢献した。特に病弱ではなかったものの38歳で発作を起こして突然死。脳出血だったとみられる。
【作品】ラルフ・ヴェーナーが総目録番号「MWV」を提唱するも普及していない
■交響曲　全5曲
・交響曲 第3番 イ短調 作品56『スコットランド』　旅行中の着想から13年後に完成 ヴィクトリア女王に献呈
・交響曲 第4番 イ長調 作品90『イタリア』　同じく旅行中に着想を得て作曲
■管弦楽曲
・序曲「夏の夜の夢」作品21　17歳(!) ソナタ形式による創意に満ちた傑作
・付随音楽「夏の夜の夢」作品61　34歳 プロイセン王の勅命により作曲 序曲と変わらない世界観**【譜例7】**
・序曲「フィンガルの洞窟」作品26　20歳 初の渡英時に訪れたヘブリディーズ諸島の「一流の風景画」
■協奏曲
・ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64　この分野の最高傑作の1つ 各楽章は切れ目なく演奏される**【譜例8】**
■宗教作品
・オラトリオ『パウロ』作品36
・オラトリオ『エリヤ』作品70
■歌曲
・歌の翼に 作品34-2〈ハイネ〉
■ピアノ曲　若い頃はピアニストとして活躍 技巧的な作品も多い
●無言歌集　全8集 48曲　ロマン派ピアノ曲の基本書法（「**3本の手**」）を確立
・作品19b-1「甘い思い出」**【譜例9】**
・作品19b-3「狩の歌」
・作品19b-4「信頼」**【譜例10】**
・作品19b-6『ヴェネツィアの舟歌』　舟歌（バルカローレ）という曲種の最初の作例
・作品30-6『ヴェネツィアの舟歌』
・作品38-6『デュエット』　2つの旋律声部（男声・女声）と伴奏をピアノ独奏で表現
・作品62-5『ヴェネツィアの舟歌』
・作品62-6「春の歌」
・作品67-4「紡ぎ歌」
・ロンド・カプリチオーゾ 作品14
・6つの前奏曲とフーガ 作品35　擬古典主義の代表作 バッハの書法とロマン派様式の融合　**【譜例11】**
・厳格な変奏曲 ニ短調 作品54
【キーワード】ユダヤ人問題　父アブラハムの意向で一家でキリスト教（ルター派プロテスタント）に改宗。その象徴として、母方親族の「バルトルディ」姓を使用することになったが、ユダヤ人の尊厳と信仰の自由を説いた偉大な哲学者の祖父**モーゼス・メンデルスゾーン**への共感が大きかったフェリックスは以降も「メンデルスゾーン＝バルトルディ」の二重姓を名乗った。没後3年の1850年、ヴァーグナーが論文『音楽におけるユダヤ性』を発表、反ユダヤ主義の論点からメンデルスゾーンを批判。ナチス政権下では「頽廃音楽」として演奏禁止に追い込まれた。現在も研究が進んでいない遠因と考えられる。
【特徴】“モーツァルト以来の神童”“ロマン派分裂の火種”
・器楽的で流麗な旋律線、軽やかなスタッカートのパッセージが持ち味。この資質は10代にして早くも完成。わかりやすく上品な音楽はわが国でも洋楽黎明期から親しまれた。
・**古典（回帰）主義者**で、均整のとれた音楽づくりを重視。演奏者としてもバッハの復活に尽力した。その影響から擬古典・宗教作品も多い。
・内面の深みに欠けるという批判も。前時代的な「職人肌」の作曲家であり、万能の人だった。生前から高く評価され、要職を歴任したが、そのぶん羨望や敵意の対象にもなった。
・死去翌年、シューマンとリストの間でメンデルスゾーンの評価をめぐって衝突。争いはブラームス（保守派）VSヴァーグナー（革新派）に引き継がれ、音楽界を揺るがす大論争へと発展する。

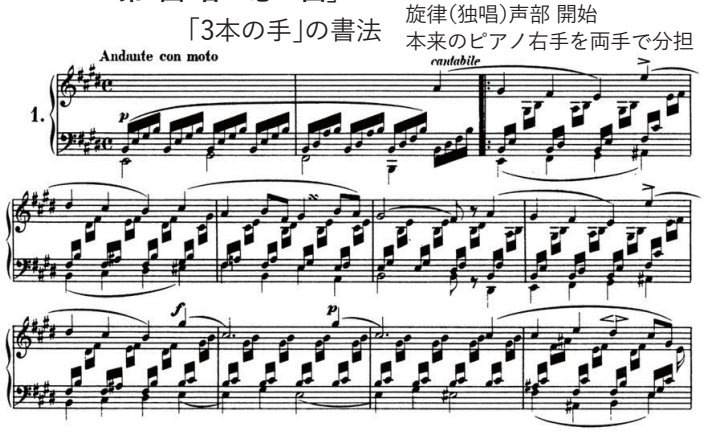
【譜例7】メンデルスゾーン：付随音楽「夏の夜の夢」作品61～第1曲 スケルツォ（妖精の踊り）



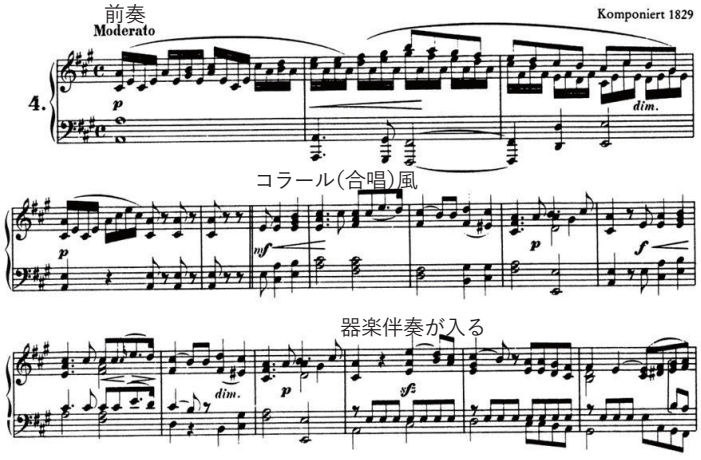
【譜例8】メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64　第1楽章　ヴァイオリン独奏譜



【譜例9】メンデルスゾーン：無言歌集 第1集 作品19bより
第1曲「甘い思い出」



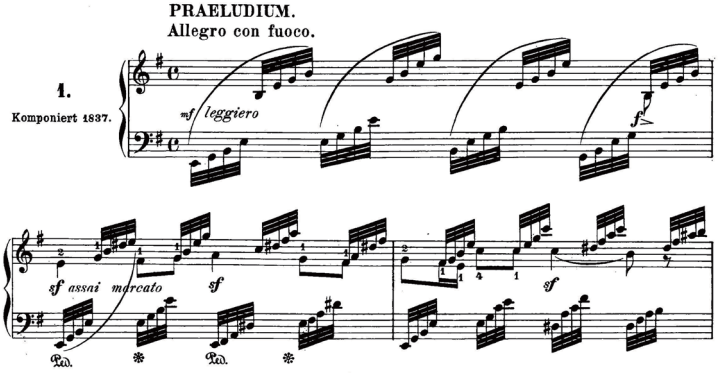
【譜例10】メンデルスゾーン：無言歌集 第1集 作品19bより
第4曲「信頼」



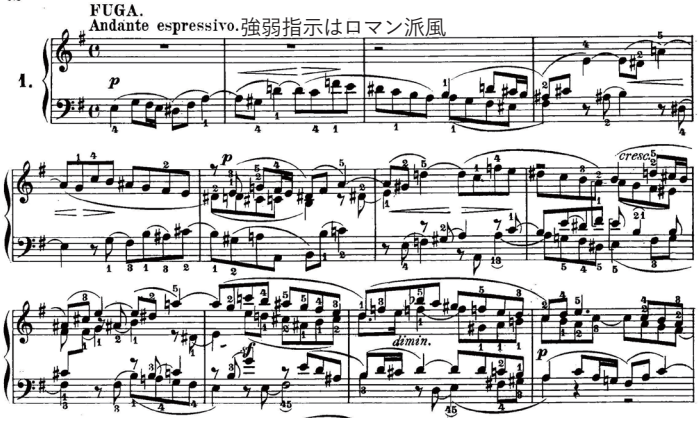
【譜例11】メンデルスゾーン：6つの前奏曲とフーガ 作品35
より 第1曲 ホ短調

擬古典様式（バロック＋ロマンの融合）

前奏曲　ロマン派様式（両手アルペジオ＋旋律の「3本の手」）

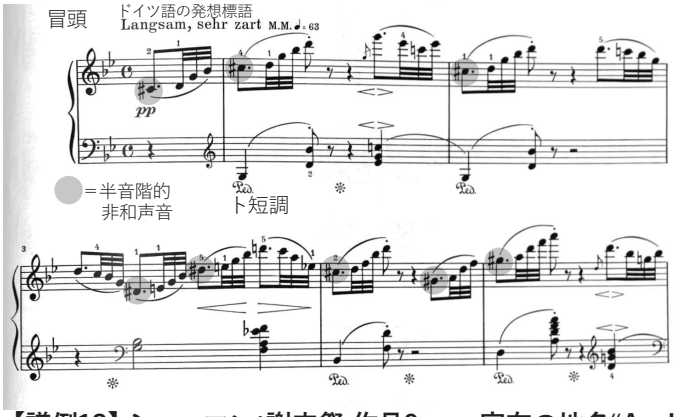


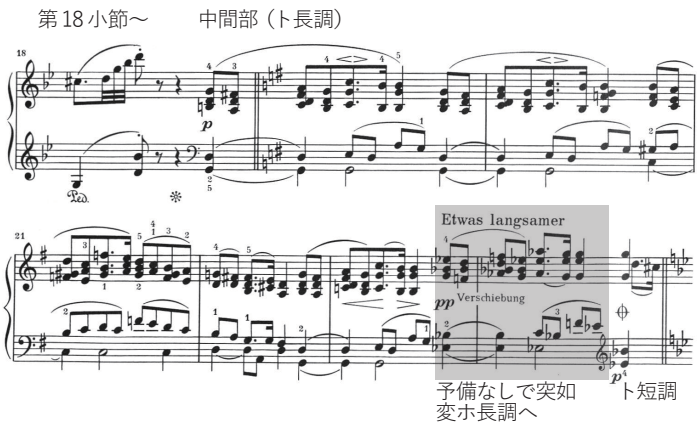
フーガ　バッハ様式



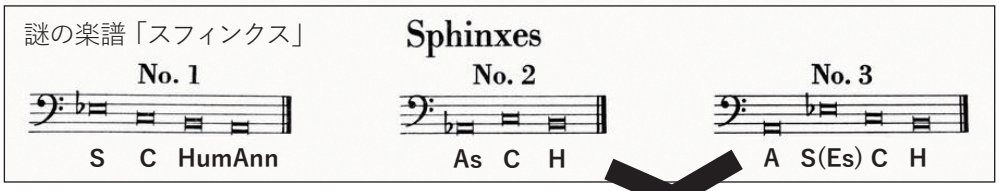
4. ロベルト・シューマン（1810.6.8. ツヴィッカウ ～ 1856.7.29. ボン近郊エンデニヒ）
【生涯】書籍商・出版社の父のもとに生まれ、少年期から音楽や文学に熱中する。母の希望からライプツィヒ大学で法学を学ぶが、音楽への情熱を捨てきれず20歳のとき名ピアノ教師フリードリヒ・ヴィークの内弟子に。ほどなく指に故障が出てピアニストの道を諦め、作曲と評論に集中、24歳のとき音楽雑誌「**新音楽時報**」を創刊。やがてヴィークの娘で天才少女ピアニストとして知られた**クララ**と恋愛関係になり、ヴィークとの訴訟を経て1840年に結婚。数年後から幻聴や恐怖症などの**神経症状**に見舞われ、転地も兼ねて1844年にはドレスデン、50年にはデュッセルドルフへと転居したが、症状は次第に悪化、麻痺や幻覚を生じる。1853年、20歳のブラームスの訪問を受けその才能を絶賛するが、翌年ライン川に**投身自殺**を図る。救助されエンデニヒの精神病院に収容されたが回復することはなく、2年後に46歳で没。その精神疾患についてはさまざまに議論されてきたが、現在では梅毒が原因と考えられている。
【キーワード】クララ・シューマン（旧姓ヴィーク）　父ヴィークの英才教育を受け、9歳でライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と共演してデビュー。以降ヨーロッパ各地で演奏し「天才少女」と騒がれる。21歳でロベルトと結婚後は、家庭生活の傍ら活発な演奏活動を行い家計を支えた。互いに尊敬し合う理想の「芸術家夫婦」とされたが、実際には夫はほぼ収入がなく、スーパースターの妻の付き人のように扱われて傷ついたという。夫の死後はブラームスと親しく交流、亡夫の作品全集の編纂にも携わった。作曲にもすぐれ、ロベルト名義の作品のいくつかは実際にはクララの作品といわれる。
フロレスタンとオイゼビウス　シューマンの評論の主要登場人物。フロレスタンは気まぐれな激情家、オイゼビウスはやさしく瞑想的な性格で、この対照的な二者の対話によって評論を展開した。実際にはどちらもシューマンの分身であり、多重人格傾向の現れとみる向きもある。
【作品】時期によって作曲ジャンルに偏りがあり、**同じ分野の作品を立て続けに作曲した後に次の分野に移る**。このような作曲家は他に例がない。
■ピアノ曲の時代：1830~39年（20代）作品1～23まで**すべてピアノ曲**
・蝶々 作品2　全12曲 ジャン・パウルの「生意気盛り」の仮面舞踏会のシーンから着想
・ダヴィッド同盟舞曲集 作品6　全18曲「ダヴィッド同盟」は旧習と戦う芸術家たちの架空団体
・謝肉祭 作品9　全20曲 音名遊びを高度に展開し舞踏会の一夜を描写　**【譜例13】**
・ピアノ・ソナタ 第1番 嬰ヘ短調 作品11　古典的枠組みとロマン主義の融合 クララに献呈
・交響的練習曲 作品13　性格変奏の代表作 主題＋12の変奏＋5つの補遺変奏
・ピアノ・ソナタ 第3番 ヘ短調 作品14　原題は「管弦楽のない協奏曲」クララの主題による変奏曲を含む
・こどもの情景 作品15　全13曲 第7曲「トロイメライ」は特に有名
・クライスレリアーナ 作品16　全8曲 E.T.A.ホフマンの評論集に由来 ショパンに献呈
・幻想曲 ハ長調 作品17　全3楽章のソナタ風幻想曲 リストに献呈
・アラベスク ハ長調 作品18
■**歌曲の年**：1840年（30歳、クララとの結婚の年）　1年間で140曲もの歌曲を作曲
・歌曲集「リーダークライス」作品24〈ハイネ〉全9曲
・歌曲集「ミルテの花」作品25〈リュッケルト、ゲーテ、ハイネら〉全26曲　「献呈」「君は花のように」など
・歌曲集「リーダークライス」作品39〈アイヒェンドルフ〉全12曲　「月の夜」「春の夜」など
・連作歌曲「女の愛と生涯」作品42〈シャミッソー〉全8曲
・連作歌曲「詩人の恋」作品48〈ハイネ〉全16曲
・混声四重唱「流浪の民」作品29-3〈ガイベル〉
■交響曲の年：1841年
・交響曲 第1番 変ロ長調 作品38「春」
・交響曲 第4番 ニ短調 作品120（後に改訂）
■室内楽の年：1842年
・3つの弦楽四重奏曲 作品41
・ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44
・ピアノ四重奏曲 変ホ長調 作品47
■後期（ドレスデン移住後）の主な作品
・ピアノ協奏曲 イ短調 作品54
・ピアノ曲集「こどものためのアルバム」作品68　現在も人気の教材「楽しき農夫」「勇敢な騎士」など
・ピアノ曲集「森の情景」作品82　第7曲「予言の鳥」が有名　**【譜例12】**
・交響曲 第3番 変ホ長調 作品97「ライン」　**【譜例14】**
【特徴】“ロマン派の体現者”　最もロマン派的な作曲家
・初期のピアノ曲には**文学の影響**が強い。気紛れな曲想の変化、瞬間的なひらめき、幻想的な世界観。多数の小品を数珠つなぎのように並べた独特の大規模作品を創始。
・シューベルト以降最大の**歌曲作曲家**。詩の選択に文学への深い造詣。ピアノパートに重要な役割。
・古典を範とし、バッハが得意とした対位法や**音名遊び**を自作にも採り入れた。
・結婚を境に絶対音楽的な指向が強まり、構成の均整に意識を割くようになる。晩年に近づくにつれ支離滅裂で難解な作品も。

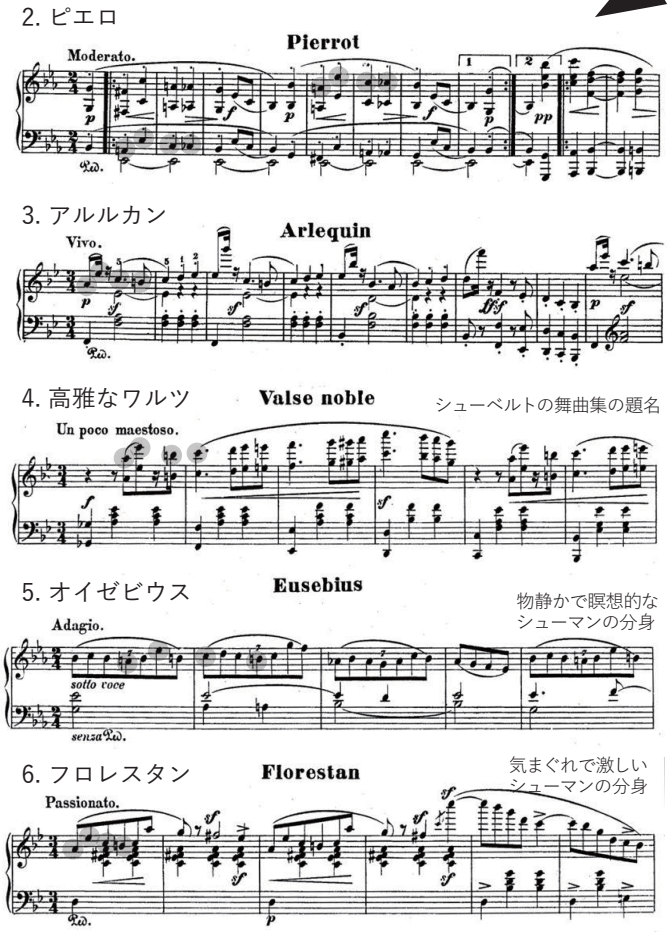
【譜例12】森の情景 作品82より 第7曲「予言の鳥」

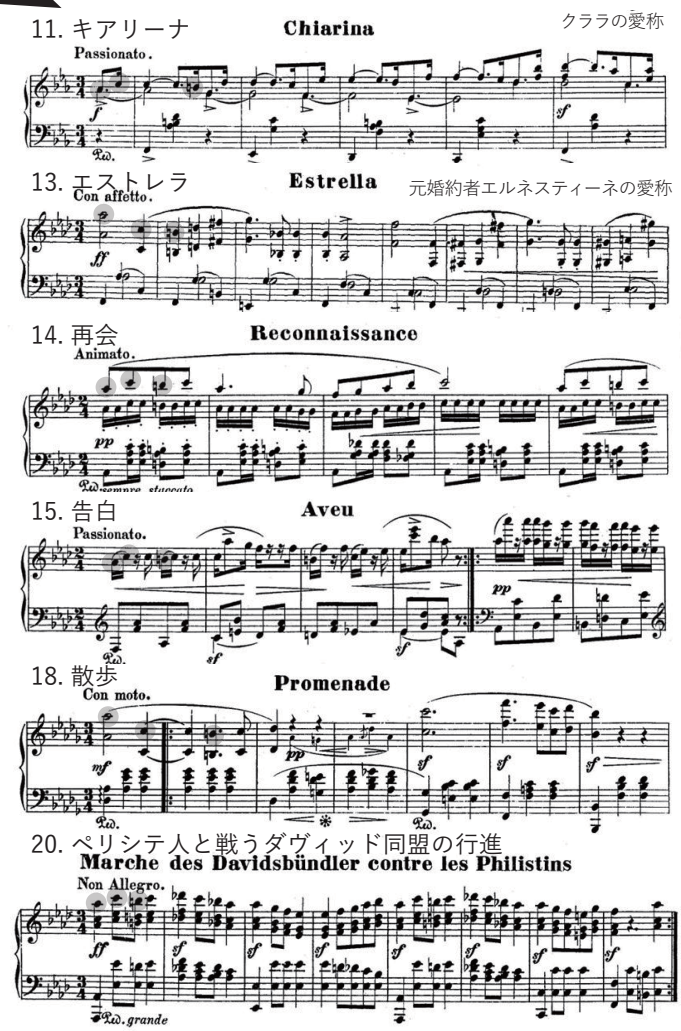




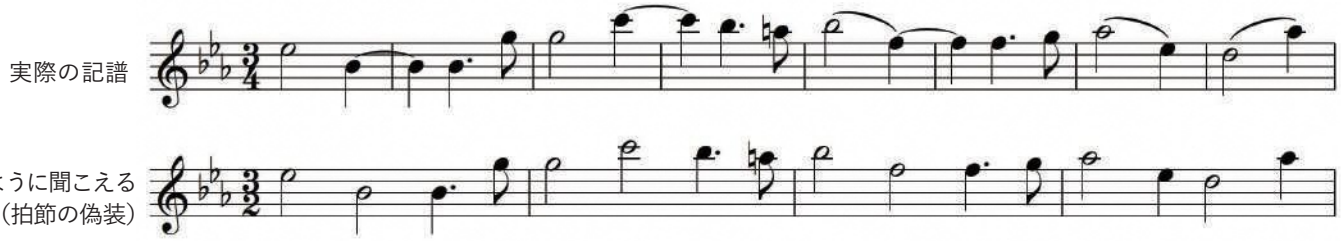
【譜例13】シューマン：謝肉祭 作品9　　実在の地名“Asch”による音名（アルファベット）遊び







【譜例14】シューマン：交響曲 第3番 変ホ長調 作品97「ライン」より 第1楽章 第1主題



©Takashi Sato 2022